

## 演題7 脂肪腫9例の臨床的検討

○岡村 悟, 伊藤 信明, 宮沢 政義  
工藤 啓吾, 藤岡 幸雄, 武田 泰典\*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座\*

今回我々は、昭和44年6月から昭和55年9月までの11年3カ月間に当科で経験した9例の脂肪腫について、臨床的検討を行なったので、その概要を報告した。

性別では、男性3例、女性6例で、男：女比1：2と女性に多かった。その年齢は、3カ月から69歳までと広範囲におよんでいたが、40歳以上が7例で、平均年齢42.3歳であった。主訴は、腫瘍や腫脹が圧倒的に多く8例を占め、異和感を訴えたものが1例であった。発生部位は、頬部および頬粘膜部が5例と最も多く、舌、軟口蓋、臼後部、頸部が各1例であった。腫瘍の外形は、類円形のものが3例、卵円形が3例、円形が2例、有茎性ポリープ状が1例であり、全例も周囲組織との境界は明瞭であった。腫瘍の大きさでは、小鶏卵大の1例が最も大きく、次いで鳩卵大1例、雀卵大2例、示指頭大3例、小指頭大および小豆大が各1例であった。硬さは、弾性軟を呈したものが5例、弾性硬が3例、全体的に弾性軟であるが部分的に弾性硬を呈したものが1例であった。腫瘍を被覆する粘膜および皮膚の性状では、平滑なものが8例とほとんどを占め、潰瘍を形成したものが1例であり、色調は、正常色を呈したものが6例、発赤が3例であった。腫瘍を自覚してから来院するまでの期間をみると、6カ月未満のものが4例と最も多く、1年以上2年未満が2例、2年以上3年未満が2例、4～5年のものが1例であった。組織型では、単純性脂肪腫が8例と圧倒的に多く、線維性脂肪腫が1例であった。処置としては、治療を拒否した1例を除き、全例とも手術を施行していた。その内訳は、摘出が7例、切除が1例であった。術後経過は良好で再発例はみられていない。

## 演題8 歯根中央部に発生した水平破折の1症例

○安藤 良彦, 遠藤 正道, 久保田 稔

岩手医科大学歯学部保存学第一講座

Andreasenによると、歯根破折は、口腔外傷のうち

の1～7%に生ずるといふ。Grossmanは、歯根破折について、一般に破折位置が根尖側1/3以下ならば予後は良好であり、歯根の中央ないし歯冠側1/3で破折した場合には、予後は不良であると述べている。

今回、演者等は、27歳男子の上顎左側中切歯歯根中央1/3における破折に対し、受傷1週後に、エッチングのちエナメライトを両隣接歯との鼓形空隙に置く固定、受傷後約1カ月の時点で生じた冷水痛に対し抜髄およびGPポイントとチャンネルによる根管充填、および、固定後約2カ月でレジンが破壊したための再固定を行ない、その経過を、X線所見、臨床所見に基づいて述べ、さらに歯根破折の概要に対し若干の文献的考察を加え報告した。

受傷後9年4カ月を経過した現在、X線写真上で、破折片間の離開が見られるものの、周囲組織に異常な透影像は見られず、歯槽硬線も歯根全周にわたり明瞭に観察され、臨床的にならん支障なく機能している。

今回経験した根中央1/3における破折歯は、偶然に幸運な経過をたどったのにすぎないかも知れないが、このように10年近く機能している症例も存在したので、根中央1/3における破折においても、安易な抜歯は避けるべきであると思われる。

## 演題9 小唾液腺良性腫瘍におけるIgAおよびSCの免疫組織学的検討

○佐島 三重子, 武田 泰典, 鈴木 鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

唾液腺での従来の免疫グロブリン検索は主としてヒトおよび動物の正常大唾液腺についてなされており、小唾液腺ならびにそれに由来する腫瘍における検索は未だなされていない。そこで私共は正常小唾液腺ならびに小唾液腺より発生した良性腫瘍におけるIgAおよびSCの局在性を酵素抗体法(PAP法)で検索し、唾液腺上皮の腫瘍化に伴うIgAならびにSCの局在性の変化を観察した。

材料は過去12年間に当教室で扱った小唾液腺原発の良性腫瘍31例で、その内訳はpleomorphic adenoma 30例、monomorphic adenoma 1例である。また対照群として腫瘍や粘液嚢胞摘出時に周囲に付着していた形態的には正常と思われた小唾液腺を用いた。

検索方法は材料をそれぞれ4μmのパラフィン切片とし、DAKO社製PAPKITでIgA(α chain and

secretory component specific) をまたSCの検索にあたっては抗ヒトSC家兔血清(DAKO社)を希釈して一次抗体と同様にPAP法を行なった。

対照群の小唾腺ではIgA, SCとも約半の症例に陽性所見が認められた。陽性部位は介在部小葉内および小葉間などの小導管上皮細胞であり、粘液腺房細胞ではIgAおよびSCとも陰性であった。また全般的にSCはIgAより顕著な陽性所見を呈した。

Pleomorphic adenomaではIgA, SCとも約半の症例に陽性所見がみられ、さらにIgAとSCは同一の部位に認められることが多かった。また、Pleomorphic adenomaでは対照群と比較してIgAおよびSCにより顕著な陽性所見を呈するものが多く、陽性細胞の出現頻度も多くなっていた。Pleomorphic adenomaは多様な組織像を呈する良性腫瘍であるが、組織型とIgAおよびSCの局在性との関係については、腺管状および充実性に増殖する腫瘍上皮細胞で陽性を呈し、粘液様と軟骨様部の腫瘍細胞およびその周囲間質、硝子化部分は陰性であった。Monomorphic adenomaの1例ではIgAおよびSCに中等度に陽性を呈する腫瘍上皮細胞が一定の局在性を示さずびまん性に散在していた。

#### 演題10 濾胞性歯嚢胞における hyaline body の病理組織学的検討

○守田 裕啓, 武田 泰典

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

歯原性嚢胞に特異的に出現するとされている hyaline body (以下 hb) の由来として従来より種々のものが考えられるが、大別して血液由来説と上皮細胞由来説とがある。近年 hd は dental cuticle (以下 dc) と同様の性状を示すことから、歯原上皮に関連したものとも考えられている。今回我々は hb が高頻度に出現するとされている濾胞性歯嚢胞について当教室で過去12年間に扱った生検例をもとに臨床病理学的ならびに病理組織学的に検索した。hb は106例の濾胞性歯嚢胞の内10.4% (11例) に認められ、その出現頻度は従来の報告とほぼ一致していた。臨床的に hb の出現は年齢、発症部位などと特に関連はなかった。hb の出現頻度を組織型別にみると、dentigerous cyst 6例、primordial cyst 5例と大差はなかったが、その組織学的な出現部位はほとんどが上皮内であり、上皮下に

認められたものは1例のみであった。hb の多くは嚢胞腔内面に突出した上皮内に認められ、形態的には lamellar, linear, homogenous などの様相を呈していた。

hb の種々の染色性はオルセイン染色、コンゴ赤染色に陽性であり、ベルリン青染色、PAS、アルアン青染色、トルイジン青染色などに対しては陰性、もしくは一部弱陽性を呈した。電顕では hb は上皮細胞の胞体内外に認められ、とくに胞体外の hb に接する上皮細胞の基底側には hemidesmosome が認められた。また lamellar な hb では同心円状の構造が電子密度の濃淡として交互に配列し、homogenous な hb は不定形で density もやや低下していた。

hb を dc との関連で検索すると、dc は hb 同様オルセイン、コンゴ赤陽性を示した。また症例の中には dc が次第に肥厚し lamellar な hb に移行している像を呈する所があり、hb は dc と同様に歯原性上皮細胞に由来することを示唆する所見と考えられた。

#### 演題11 本学の生検にみる癌舌の病理学的検討

○佐藤 方信, 畠山 節子, 佐島 三重子  
鈴木 鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

近年、本邦においては舌癌による死亡者は遂年的に増加している。著者らは舌癌の実態の解明を目的に本学中検病理にて過去10年間(1972—1981)に取扱った舌癌生検98例をもとに病理学的解析を試みた。

性別症例数は男性68例(69.4%)、女性30例(30.6%)であり、来院時年齢では50才代が25例(25.5%)で最も多かった。発生部位別に症例数をみると舌体左側縁が50.9%、右側縁が34.6%の症例でみられ、症例の50%は疼痛を主訴としていた。組織学的分化度(WHO)別には Grade I が57例(58.2%)、Grade II が32例(32.7%)、Grade III が9例(9.2%)であった。上皮浸潤程度別には粘膜下組織へ浸潤していたのが10例(10.9%)、筋層まで浸潤していたのが82例(89.1%)であり、浸潤様式別には滴下浸潤が38例(39.6%)、癒合浸潤が58例(60.4%)であった。癌周囲炎症細胞浸潤では軽度の浸潤を示す症例が57例(58.2%)、高度の浸潤を示す症例が37例(37.7%)であり、浸潤細胞は主にリンパ球で時に好中球をまじえていた。